

や宗教現象の社会学的理論の分野を開拓、「理念型論」を提唱、学界に大きな影響を与えた。政治については、心情倫理と区別された責任倫理を説く。著書に「経済と社会」「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」「職業としての政治」などがある。

## 2) 社会主義学派、マルクス経済学派 Marx economics

ドイツ観念論、初期社会主義（空想的社会主義）、および古典経済学を批判的に摂取して科学的社会主義の立場を創始。資本主義体制を批判。

アダム・スミスは、各人の利己心が最大限に発揮できるような自由な市場経済制度のもとで、社会的見地から見てもっとも望ましい資源配分が実現するという考え方にもとづいていた。そこには、貧困とか分配の不公正に対する問題意識は影をひそめていた。

分配の問題は、リカードによって経済学の中心的な課題とされたのであるが、さらに貧困、分配の問題をカール・マルクスは取り上げた。

スミスの労働者はマニュファクチャー制のもとで働いたが、マルクスの労働者は、産業革命以後の機械制大工場のなかで働くプロレタリアートであった。労働者が自らの労働者は、自らの労働力を商品として売るより他に、生活の術をもたないという点に、資本主義経済の本質があり、労働者は、自らの労働力が生み出したものよりはるかに少ない価値しか賃金として得られない。ここに剰余価値が発生し、利潤として資本家に帰することになってしまう、とマルクスは考えた。

資本が蓄積の至上命令にしたがって、剰余価値を最大にするように生産関係を再構築してゆく過程の進行にともなって、リカードの利潤率遞減の法則がその効果をを發揮することになる。これに対して資本家階級は、労働管理の強化、金融政策の弾力的運用、賃金財価格の引き上げなどの手段を通じて対処しようとする。しかし、利潤率低下の趨勢はさらに進み、同時に労働者階級の貧困は深刻になってゆく。やがて資本主義経済は一つの体制として維持することが出来なくなり、社会主義革命を

通じて新しい体制への移行が歴史的必然となるというのが、マルクスの結論であった。

### 3) レギュレーション学派 Regulation school

現代の経済学の差異は市場経済に対する見方の違いから生まれる。新古典派は「市場は本来安定的なもので、市場の調整機能にまかせておけば、経済は安定する」といった市場観をもち、ケインズ派とマルクス派は「市場は本来不安定なもの」とみて、ケインズ派は政府の介入によって調整しなければならないと主張する。マルクス派は「政府が介入しても安定せず、結局は内在的矛盾によって崩壊する」と捉える。

上の両者はそれぞれ行き詰まり、また崩壊して後退し、相対的に新古典派経済学が大きな発言力をもつて復活するようになった。

レギュレーション学派は、新古典派の一般均衡理論を根底的に批判する中から「調整」(Regulation)という独自の概念を構築する。このような批判によって、この学派は社会を捉える視点を、新古典派のように永久不変の経済主体＝方法論定個人主義に置かず、「社会関係」に設定し、新古典派の方法論的個人主義とは、根本的に異なることを言明する。佐々木崇暉(1996)。

### 4) 制度学派 Institutional school

佐々木(1996)にしたがって解説しよう。第2次大戦後、新古典派経済学やマルクス経済学は、それぞれ限界をもつことが議論されるようになり、これらの経済学の方法では、現在の世界経済システムの解明に重要な「文化」の問題が残される。しかし、制度主義者たちは、経済学を「人間文化の経済的局面あるいは物質的な財貨の供給に関係ある文化の局面を研究する文化科学である」と主張した。彼らは文化の両極の一方に科学技術を、他方に制度－すなわち嗜好の慣習的な様式、あるいは人々の大多数に共通な思考の確立した習慣－を考えた。制度主義は、20世紀に対立関係にあった資本主義と社会主義を超えて、すべての人々の

人間的尊厳が守られ、魂の自立が保たれ、市民的権利が最大限に享受できるような経済体制を実現しようとするものである。19世紀の終わりにヴェブレン（宇沢2000）によって唱えられたものであるが、現在にそのまま適用されうる。

① ヴェブレン Thorstein Bunde Veblen（宇沢 2000b）

19世紀末、アメリカの経済学者たちのなかに経済学の再建を強く意識した人々の中で、制度学派の創始者ヴェブレンは、1857年（安政4年、安政の大獄の起こる前年）7月30日、アメリカのウィスコンシン州マニトウオク郡ヴァルダースに生まれた。両親はノルウェーから1848年新大陸に土地を求めて移住してきた移民であった。

ヴェブレンは、父から頑健な身体、北方的な憂鬱、きびしい批判精神を右受け継ぎ、母からは、人間的な魅力と知的聡明さを受け継いだ。彼は、19世紀の正統派経済学に挑戦をし、アメリカの経済学思想野のルネッサンスの指導者となった。経済学についての体系的な著述はなかったが、ドイツ新歴史学派の影響を受け、また哲学者デューイを生涯深い影響を与えあい、資本主義の既存制度と無批判的な伝統思想とに対するその鋭い哲学的批判と洞察力とは、学界に最大の個人的刺激を与えることとなった。しかし、非正統派的思想は、同時代の人に理解されることはなかった。カント哲学の影響を深くうけた彼は、工匠本能が支配する機械技術の思考習性が、取得本能が支配する営利事業（ビジネス）の思考習性を掘りくずして、技術家のゼネ・ストによる産業共和国の実現することを構想した。

ヴェブレンの晩年は、経済的にも、社会的にも恵まれず、1929年8月3日亡くなった。その2カ月も経たないとき、ニューヨーク株式市場は史上空前の大暴落に見舞われ。そしてその後1カ月ほどして再び大暴落が起こり、アメリカは資本主義の歴史で最大規模の大恐慌に入り、西ヨーロッパ、日本など世界のすべての資本主義諸国を巻き込み、世界的規模

で経済的混乱が起こった。それは第二次世界大戦の勃発を不可避なものとした。すべてはヴェブレンが予見したとおりの形で起こったのである。

② ガルブレイス

制度学派の流れをくむアメリカの経済学者。リベラルな立場から現代資本主義を鋭く分析。制度主義に基づく研究テーマの幾つかを大衆に広めた。著書は「ゆたかな社会」、「不確実性の時代」、「新しい産業国家」、「満足の文化」など。

(むらせ つとむ 職業能力開発総合大学校名誉教授)

(たなか かずとし 職業能力開発総合大学校)